

ざま災害ボランティアネットワーク代表あいさつ

おはようございます。ざま災害ボランティアネットワーク代表の濱田です。

皆様のご協力を得て、本日、第8回の定期総会を開催する運びになりましたこと感謝いたします。

先ほどは、早朝より公務ご多用中にも関わらず遠藤市長にご来席賜りご挨拶をいただきました。本当に感謝申し上げます。

また、会に先立って、司会の方の合図で去る14日に発災しました「平成28年熊本地震」でお亡くなりになられた方に対して哀悼の意を表しました。

すでに、皆様は、災害ボランティア活動者として一般の市民の方よりも強い関心を持たれて観察されていると思います。

今回の地震は、まだ、現在進行形であり救援活動も続いております。その中から様々な事象を見たり感じたりすることが多いと思います。

これにつきましては別途、皆さんと意見交換などをして「私たちの災害」として整理したいと考えております。

今回の地震災害については気象庁や、大学の先生方の口からも「今までに想像したこともない地震」という言葉が出ております。同一地域の地震災害の中で2度の「震度7」という強烈な地震に遭遇したということは世界的に見ても稀な地震だということになりつつあります。いわゆる、「想定外だった」ということなのでしょう。

2011年3月 私たちは「東日本大震災」で有史以来と思われるような地震・津波被害を受けました。確か、私たちはそのときにも「想定外」の地震・津波災害だったという言葉を書きました。

振り返ってみて、わが国の地震学は今から約120年前に東京大学の大森房吉氏の研究により始まったといわれております。私たちの星である地球の歴史から見て120年という期間は、ほんの一瞬の長さといってもよいと思います。このように桁の違う物差しで地震を考えているというのが実情なのでしょう。ということは、実際には「地震」というものが何者なのかということも実はわかっていないということではないのでしょうか？

私たち、ざま災害ボランティアネットワークの活動は、このような思いを持って、地震災害を学ぶという専門的なことではなく、地震をはじめとする災害から自分のそして家族の「いのち」を守るためを目指してスタートしました。

そして、活動を積んできた中で、「生き残らなければ何も始まらない」という言葉として固まって座間市もこれを取りあげて、官民協働の活動になってきました。そして、この活動の

輪が広がって自発的に参加して下さった皆様の手でここまで成長してきたものと思っています。

このような活動の道をたどる団体は、非常に珍しいことなのです。神奈川県には、災害救援活動を目指す団体はたくさんありますが、私が知っている限りでは私たちの団体の方向性は先進的だと自負しています。

それは、市民活動団体が、市民・学校・各種団体に向けての減災行動、災害対応行動の啓発について知識だけでなく、生き残った後の実践的な「技」についてシンプルに啓発活動に取り組むところにあります。市民の方の中には、私たちが足元にも及ばないほどの高い知識を持たれている方もおられます。

しかし、災害の中を生き抜き、次の復旧・復興につなげるということは、防災の知識だけでは「その時」や「その場」を乗り越えることはできないと考えています。

防災知識を生き抜く技に変える、そして、その力を次の世代の方々へ伝えて、普及させてゆくことが私たちの団体の意義だと思っています。

東日本大震災は、私たちに大きな学びを残してくれました。それは、大人の判断ミスで子どもたちの命を失わせることはあってはならないということです。大人は自分の責任で判断して結果は自分が背負えばよいのです。

しかし、子供たちはそういうわけにはまいりません。この思いを大切にして、市内外の方々とつながりながら愚直にひたすら取り組んでまいりたいと思います。

これから2015年度活動報告並びに今年度の活動計画について皆様にお諮りして新しい年度の取り組みを始めたいと思います。どうぞ、今年度も皆様のご協力をいただきながら歩みを進めたいと思っています。このことをお願いして私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。